

活動報告

団体名	東北大学スクラム
活動名	広島大学生と連携した足湯ボランティア等を通じた被災者寄り添い型支援の活動
活動期間	2018年8月～2018年9月
活動の成果	<p>東北大生から広島大学の学生に足湯ボランティアを伝えることで、大学生ならではの被災者の方の心に寄り添うボランティアの方法を伝えることができた。また、今回の活度によって以下の成果も得られた。</p> <p>社会福祉協議会の災害ボランティアセンターの閉鎖に向かうフェーズの中で、次の活動の展望が見出しきれていない広島大学の学生とともに一緒に現地のニーズ調査を行い、かつワークショップを行うことができ、次のフェーズでのボランティア活動のヒントを一緒に探すことができた。また、東北大学が持つネットワークで、災害復旧において第一線で活躍する人たちと広島大学の学生につなげることができ、今後の幅広い支援活動の模索につなげることができた。</p> <p>9月までの活動では、仮設住宅の受け入れが整っていない状況で、本来であれば仮設住宅で足湯ボランティアをしながらサロン活動ができればよかったのだが、今回の活動期間には間に合わないところであった。しかしながら、広島大学と地元の社会福祉協議会ないし新設される地域支え合いセンターと話し合いの場を設けることで、今後も大学生が仮設住宅等で復興支援に携われるような下地を作ることができた。</p>
寄付者へのメッセージ	<p>近年の日本における自然災害の多発により、緊急災害支援に専門性を持つNPO・NGOが多くなってきました。経験が増すことで、緊急災害支援に必要な支援の体系化が進んでいるように思えます。災害直後に単身のボランティアが被災地に向かっても迷惑になるだけであるとか、支援物資を送りすぎると現地での仕分け作業が大変になるといった認識も世の中に広まりつつあると思います。</p> <p>すると「災害に対して大学に何ができるのか?」という問いは出てくるような気がします。しかしながら、今年の夏のように災害が多発してしまうと、どうしても災害救援を得意とするNPO・NGOは次の現場に行かなくてはなりませんし、人手も不足してしまいます。外から来た団体というのは、どうしてもそのうちに被災地を撤退する宿命にあるのがほとんどの場合です。大学というのは地域に残り続けます。泥かきのような復旧のフェーズというのは、時間が経てば目に見えるようになくなっていきます。しかしながら、復興のフェーズというのは、目に見えない形で長い間被災地に残り続けます。そのような長い目で見たときの復興に、大学生が被災地に寄り添うことのできる存在であると我々は感じています。</p> <p>今回の東北大学スクラムの活動は広島大学 OPERATION つながりカウンターパートとして、東北の経験を伝えることができました。OPERATION つながりには、今後も平成30年7月豪雨に寄り添う存在として活躍してくれることを期待しています。</p> <p>最後になりましたが、寄付者の皆様には東北からの経験を広島に伝える機会をくださったことに、多大なる感謝の意を示したいと思います。</p>